

## 熊沢蕃山の雅楽観

—十二律・律呂にかんする論を中心に—

中川 優子(東京藝術大学大学院)

近世期の日本において、儒学者をはじめとする知識人たちは、しばしば音楽に関心を寄せた。儒教の礼楽思想を主な枠組みとしていた彼らが最も理想としたのは古代聖人の「楽」、すなわち古楽であり、彼らの中には『律呂新書』の解説などにもとづく「楽」の「律」の探求によって、古楽の復興を目指す者もあらわれた。そのような楽律研究の展開については、先駆的存在である中村惕斎(1629～1702)の営為をはじめとして、近年詳細な検討が進んでいる。そして惕斎を含め、それら古楽復興へのアプローチにおいては、唐楽をはじめとする日本の雅楽と古楽との関係がしばしば問題になった。

本発表で着目するのは、近世前期、中村惕斎とほとんど同時代に活躍した儒学者・経世家の熊沢蕃山(1619～1691)である。蕃山は日本の雅楽に聖人の古楽が遺存することを主張し、その社会的教化作用を説いた思想家として知られている。とくに彼の雅楽にかんする主著といえる「雅楽解」(『集義外書』所収、以下『雅楽解』)は、礼楽の「楽」と日本の雅楽とを関連づけた最初期の著作であり、この意味で後世の知識人に影響を与えたものと位置づけられてきた(馬淵1992、武内2011)。ただこの『雅楽解』のうち、蕃山が「楽」と「雅楽」をいかに結びつけているかという問題には関心が寄せられてきた一方、雅楽の各楽器や理論などにかんする具体的な内容については検討の余地が残されているといつてよい。とりわけ十二律や律呂などにたいする言説は、古楽との関係にもとづく日本の雅楽(とくに唐楽)の理論にたいする蕃山の理解が知れるという意味で重要であろう。

以上から本発表では、主に『雅楽解』にみえる十二律や律呂などにかんする言説の検討をとおして、熊沢蕃山の雅楽観の把握を試みる。これにより、「楽」ないし古楽との関係から雅楽が注目されていった近世期の日本において、その萌芽期にあった思想の一端を明らかにしたい。